

看護職を目指す学生の主体的学習活動と学習意欲および自己効力感の検討 — 公立大学と私立大学の比較 —

宮崎千尋* 永嶋由理子*

An Examination of nursing students' autonomous learning, learning motivation and self-efficacy: Comparison between public and private universities

Chihiro MIYAZAKI Yuriko NAGASHIMA

Abstract

The purpose of this study is to clarify the difference between autonomous learning (psychological jiritsu), learning motivation and self-efficacy of nursing students at public and private universities. We conducted a questionnaire survey on 940 nursing students. We conducted t-test, correlation analysis, and multiple regression analysis. As a result, psychological jiritsu ($t(915)=-2.367, p<.05$) and self-efficacy ($t(915)=-2.326, p<.05$) were higher for nursing students at private universities than for nursing students at public universities. In addition, “grasp the present condition / future orientation” ($t(937)=-3.315, p<.01$) and “social knowledge / vision” ($t(935)=-2.636, p<.01$) which is factors of psychological jiritsu scale and “acceptance of leadership role” ($t(934)=-2.058, p<.05$) and “prospect for the future” ($t(930)=-2.177, p<.05$) which is factors of learning motivation scale were higher for nursing students at private universities than for nursing students at public universities. “Aptitude for small group learning” which is a factor of learning motivation scale was higher for nursing students at public universities than for nursing students at private universities ($t(936)=4.075, p<.001$). Furthermore, psychological jiritsu was positively related to learning motivation in both nursing students at public universities ($r=.493, p<.01$) and nursing students at private universities ($r=.504, p<.01$). Also, psychological jiritsu was positively related to self-efficacy in both nursing students at public universities ($r=.618, p<.01$) and nursing students at private universities ($r=.628, p<.01$). In order to encourage autonomous learning, it is important to provide educational support that can enhance learning motivation and self-efficacy, based on the characteristics of nursing students at public and private universities.

Key words: nursing students, autonomous learning, learning motivation, self-efficacy

要 旨

本研究の目的は、公立大学と私立大学の看護職を目指す学生の主体的学習活動（心理的自立）と学習意欲および自己効力感の相違を明らかにすることである。看護職を目指す学生940名を対象に、質問調査票にて調査し、t検定・相関分析・重回帰分析を行った。その結果、心理的自立は公立大学と私立大学に5%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高かった ($t(915)=-2.367, p<.05$)。また、自己効力感は公立大学と私立大学に5%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高かった ($t(915)=-2.326, p<.05$)。さらに心理的自立尺度の「現在把握・将来志向」は、公立大学と私立大学に1%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高かった ($t(937)=-3.315, p<.01$)。「社会的知識・視野」は、公立大学と私立大学に1%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高かった ($t(935)=-2.636, p<.01$)。学習意欲尺度の「リーダーシップ役割の受容」($t(934)=-2.058, p<.05$)と「将来に対する展望」($t(930)=-2.177, p<.05$)は、公立大学と私立大学に5%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高かった。学習意欲尺度の「小集団学習への適性」は、公立大学と私立大学に0.1%水準で有意差がみられ、公立大学の方が高かった ($t(936)=4.075, p<.001$)。さらに公立大学の学生の心理的自立は学習意欲 ($r=.493, p<.01$) および自己効力感 ($r=.618, p<.01$) と正の関連性があった。私立大学の学生も同様に心理的自立は学習意欲 ($r=.504, p<.01$) および自己効力感 ($r=.628, p<.01$) と正の関連性があった。以上の結果より、主体的学習活動を促すためには、公立大学と私立大学の看護職を目指す学生の特性をふまえ、学習意欲や自己効力感を相互に高めることができる教育的支援を行っていくことが重要である。

キーワード：看護職を目指す学生、主体的学習活動、学習意欲、自己効力感

*福岡県立大学看護学部
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University

連絡先：〒825-8585 福岡県田川市伊田4395番地
福岡県立大学看護学部
宮崎千尋
E-mail: cmiyazaki@fukuoka-pu.ac.jp

緒言

近年、医療技術の進歩や患者のニーズの多様化に伴い、看護基礎教育において看護系大学は、自ら主体的に考え行動できる質の高い看護職者を育成することが期待されている¹⁾。そのため、看護職を目指す学生は主体的に学ぶ力を身につけ、主体性を獲得していくことが必要である。しかし、看護職を目指す学生は、自ら主体的に考え行動していくという「主体性」が身につけていないことが示唆されている^{2,3)}。これは、看護基礎教育において、教育の特性からカリキュラムが過密となっており⁴⁾、能動的に学習に取り組むことが困難であることや教師に依存する待ちの姿勢をとること等の現代学生の特徴が要因として挙げられる^{5,6)}。そのため、いかに主体性を獲得し、主体的学習活動につなげていくことができるのか検討する必要があると考えた。主体性は、自己の内面から行動を生起させ遂行することであるため、まずは内的要因を高める必要があると考えた。内的要因の中でも、学習意欲や自己効力感は、直接的に自身の行動を生起させ、遂行していくことに結びつきやすいといわれており、学習意欲や自己効力感を高めることができれば、より効果的に学生自ら主体的学習活動につなげていくことが可能になるのではないかと考えた。

看護基礎教育を行う教育機関には、大学をはじめ、短期大学や専門学校など各種ある。中でも、看護系大学は、近年増加の一途をたどっており、看護系大学のほとんどが公立大学と私立大学で占めている⁷⁾。これらの教育機関のうち、公立大学は地域のニーズに根ざした専門職の育成を目指し、教育理念やカリキュラムを編成しており、私立大学は、大学個々の建学の精神をもとに独自の教育理念やカリキュラムを編成していると考えられる。このように各大学のニーズに応じた教育理念やカリキュラムのもと教育を受けている看護職を目指す学生の主体的学習活動を促すためには、それぞれの教育機関に所属する学生の違いを把握する必要があると考えた。これまでの先行研究では、大学の設置形態別の学生の資質やスキル、適応度や学習行動等が明らかになっている⁸⁾。しかし、看護職を目指す学生に特化した学習行動や学習意欲、自己効力感を設置形態別に調査した研究は調べた限りではなかった。そこで、本研究では、公立大学と私立大学という大学の設置形態の異なる看護職を目指す学生の主体的学習活動と学習意

欲および自己効力感の相違を明らかにすることとした。各大学の看護職を目指す学生の相違を明らかにすることで、各大学の看護職を目指す学生の特性をふまえた主体的学習活動の取り組みについて教育的支援の一部示唆を得ることができると考える。

用語の定義

1. 主体的学習活動

溝上や浅海、鹿毛が定義する主体性^{9,10)}や主体的な学習¹¹⁾を参考にし、学習者自身の意志や判断により学習しようと決定し、他者の意見を取り入れるとともに、自らの思考・感情・行為を自分でコントロールしながら、問題解決に向け積極的に取り組む学習と定義する。

2. 学習意欲

鹿毛の定義する学習意欲¹¹⁾を参考にし、学習に対し、自身の欲求と意志により自ら活動を行い、知識・技能・態度を獲得するために学習活動を維持する心の働きと定義する。

3. 自己効力感

Banduraの定義する自己効力感¹²⁾を参考にし、ある結果を生ずるのに必要な行動をうまく行うことができるという確信と定義する。

方法

1. 研究デザイン

量的研究

2. 研究対象

九州・沖縄県内の看護系大学に在学する看護職を目指す学生1088名(看護職を目指す学生は、看護師・保健師・助産師・養護教諭等を目指している学生を指す)

3. 研究期間

2017年1月下旬～2017年4月上旬

4. 調査方法

無記名自記式の質問調査票による調査

5. 調査内容

1) 基本属性4項目(年齢、学年、性別、実習経験の有無)

2) 永嶋が作成した看護学生の学習意欲尺度¹³⁾33項目

「学習態度」「リーダーシップ役割の受容」「演習・実習への期待」「将来に対する展望」「小集団学習への適性」の5つの下位尺度からなる計33項

目で構成されている。当てはまる4点、やや当てはまる3点、あまり当てはまらない2点、当てはまらない1点の4件法で回答を求める。

尺度を使用した理由について、永嶋は、看護職を目指す学生の学習には、知識の習得のみならず、看護技術の習得、知識や技術を臨地実習という実践の場で統合すること等があり¹³⁾、この尺度は、看護教育に特有の実践思考性の高い演習・実習、小集団での課題遂行、看護への興味・関心を含めた看護学生の学習意欲を測定するものである¹³⁾。このように看護職を目指す学生の学習内容を網羅し、その学習に対する意欲を測定するためには、看護職を目指す学生独自の学習意欲尺度を使用することが適切であると考えられる。また永嶋の捉える学習意欲の概念と本研究における学習意欲の概念は類似するため、本研究では、信頼性・妥当性が検証されているこの尺度を使用することとした。

3) 成田、下仲、中里他が作成した特性的自己効力感尺度¹⁴⁾23項目

Sherer, Maddux, Mercandante et alのSE尺度¹⁵⁾を翻訳し、計23項目から構成されている。そう思う5点、まあそう思う4点、どちらともいえない3点、あまりそう思わない2点、そう思わない1点の5件法で回答を求める。

尺度を使用した理由について、特性的自己効力感が課題や学習などの状況における自己効力感に影響を与えていることが明らかとなっており^{14,16)}、特性的自己効力感を測定することで、学習における自己効力感も捉えることができると考えた。また、この尺度は特性的自己効力感を測定する先駆者のSE尺度をもとに作成しており、性や年齢を問わず、信頼性・妥当性が検証されている。そのため、看護職を目指す学生の自己効力感を測定できると考え、この尺度を使用することとした。

4) 高坂、戸田が作成した心理的自立尺度¹⁷⁾29項目

「価値判断・実行」「自己統制・客観視」「現在把握・将来志向」「適切な対人関係」「社会的知識・視野」の5つの下位尺度からなる計29項目で構成されている。回答は、非常にあてはまる7点、あてはまる6点、ややあてはまる5点、どちらともいえない4点、あまりあてはまらない3点、あてはまらない2点、全くあてはまらない1点の7件法で求める。

尺度を使用した理由について、心理的自立は、

渡邊の自立を消極的自立（他者を頼らない・他者に依存しない）と積極的自立（自己判断・自己決定・自己統制に基づき、時間的展望を持って主体的に自己自身の力でやる）という概念¹⁸⁾をはじめ自立に関する先行研究にもとづき、自立を行動的自立・価値的自立・情緒的自立・認知的自立の4つの側面から捉えている¹⁹⁾。行動的自立とは、「自らの意志で決定した行動を、自分の力で言い、その結果の責任をとることができるようになること（実行と責任）」である。価値的自立とは、「行動・思考の指針となる価値基準を明確に持ち、それに従って物事の善悪、行動の方針などの判断を下すことができるようになること（価値観と判断）」である。情緒的自立とは、「他者との心の交流をもつとともに、感情のコントロールができ、常に心の安定を保つことができるようになること（自己統制と適切な対人関係）」である。認知的自立とは、「現在の自分をありのままに認めるとともに、他者の行動、思考、立場および外的事象を客観的に理解・把握することができるようになること（自己認知と社会的知識・視野）」¹⁹⁾である。これらの4つの側面は、行為者自らの意志や判断により、自己決定し、問題解決に向け積極的に行動していくという認知レベルから行動レベルまでの主体性の概念を含んでいる。さらには、他者の意見を求め、客観的に理解・把握するという主体的な学習につながる要素も含んでおり、心理的自立尺度は、本研究で定義した主体的学習活動を最も包括的に捉えていると解釈した。そのため信頼性・妥当性の検証されているこの尺度を使用することとした。以降、心理的自立を主体的学習活動と読み替える。

6. データ収集方法

九州・沖縄県内の5つの看護系大学に対し、研究協力の依頼を行った。そのうち、2つの公立大学と1つの私立大学から研究協力の内諾を得られた。研究協力の内諾を得られた大学の学部長に対し、研究に関する説明を行い同意を得た。研究対象者への研究の説明・研究協力説明書と質問調査票の配布は、当該研究者が直接行った。当該研究者が直接行うことができなかつた大学には研究協力教員が研究対象者に研究の説明と研究協力説明書・質問調査票を配布した。配布後、質問調査票の記入時間を設け、回収は同教室内に設置した回収箱で行った。質問調査票の記入時間を設けることができない場合には、一

定期間、指定の場所に回収箱を設置し、研究対象者に質問調査票を投函してもらった。回収した質問調査票は、コード化した。入力ミスを防ぐため、複数回データの入力確認を行った。

7. データ分析方法

質問調査票1088部を配布後、962部を回収した(回収率88.4%)。回答が不完全な項目は欠損値とし、質問項目の半数以上を欠損しているデータは分析対象から除外し、940名分を分析対象とした(有効回答率97.7%)。統計処理は、SPSS24.0 for Windowsを用いた。大学の設置形態別(公立大学と私立大学)による学生の属性の人数比の偏りを検討するため、 χ^2 検定・*t*検定を行った。また、大学の設置形態別に看護職を目指す学生の主体的学習活動と学習意欲および自己効力感の比較を行うため、*t*検定を行った。さらに、大学の設置形態別に看護職を目指す学生の主体的学習活動と学習意欲および自己効力感との関連性を明らかにするためにPearsonの相関分析と従属変数を心理的自立、独立変数を学習意欲・自己効力感とした強制投入法による重回帰分析を行った。

8. 倫理的配慮

本研究は、福岡県立大学研究倫理部会の承認を得て、これを遵守し実施した。研究協力者に研究の趣旨と方法、研究協力は自由意思で協力しない場合も不利益は被らず成績には影響しないこと、個人を特定しないこと、研究に関する質問や相談に応じられるように当該研究者の連絡先を研究協力説明書に明記し、文書と口頭で説明した。

結 果

1. 研究対象者の属性 (表1・表2・表3)

研究対象者の属性を表1～3に示す。大学の設置形態別による学生の属性(学年、実習経験)の人数比の偏りを検討するため、 χ^2 検定を行った。その結果、公立大学と私立大学において、学年($\chi^2(3)=38.122, p<.001$)と実習経験($\chi^2(1)=183.968, p<.001$)に有意な人数比率の偏りがみられた。また、大学の設置形態別による学生の属性(年齢)の人数比の偏りを検討するため、*t*検定を行った。その結果、公立大学と私立大学の学生の年齢に有意差はみられなかった($t(925)=1.063, n.s.$)。

表1 基本属性 (学年)

| | 公立大学 | | 私立大学 | | |
|----|------|-----|------|-----|------|
| | n | % | n | % | |
| 学年 | 1年生 | 164 | 27.2 | 105 | 31.2 |
| | 2年生 | 157 | 26.0 | 36 | 10.7 |
| | 3年生 | 158 | 26.2 | 87 | 25.8 |
| | 4年生 | 124 | 20.6 | 109 | 32.3 |
| 計 | 603 | | 337 | | |

$\chi^2(3)=38.122, p<.001$

表2 基本属性 (実習経験)

| | 公立大学 | | 私立大学 | | |
|------|------|-----|------|-----|------|
| | n | % | n | % | |
| 実習経験 | あり | 590 | 98.5 | 229 | 68.0 |
| | なし | 9 | 1.5 | 108 | 32.0 |
| | 不明 | 4 | | 0 | |

$\chi^2(1)=183.968, p<.001$

表3 基本属性 (年齢)

| | 公立大学 | | | 私立大学 | | | <i>t</i> 値 | 自由度 |
|----|------|-------|-----------|------|-------|-----------|------------|-----|
| | n | 平均 | <i>SD</i> | n | 平均 | <i>SD</i> | | |
| 年齢 | 591 | 20.89 | 2.53 | 336 | 20.72 | 1.66 | 1.063 | 925 |

*t*検定

2. 公立大学と私立大学の心理的自立と学習意欲および自己効力感の比較について (表4)

大学の設置形態別による心理的自立、学習意欲、自己効力感の比較をするために、各尺度の平均値について*t*検定による分析を行った。その結果、心理的自立について公立大学の平均値は4.65(*SD*=0.74)、私立大学の平均値は4.77(*SD*=0.73)であり、公立大学と私立大学に5%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高い値を示した($t(915)=-2.367, p<.05$)。また、自己効力感について、公立大学の平均値は3.06(*SD*=0.53)、私立大学の平均値は3.14(*SD*=0.54)であり、公立大学と私立大学に5%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高い値を示した($t(915)=-2.326, p<.05$)。学習意欲について、公立大学と私立大学に有意差はみられなかった($t(905)=-0.088, n.s.$)。

3. 公立大学と私立大学の心理的自立の下位尺度の比較について (表5)

大学の設置形態別による心理的自立の下位尺度の

比較をするために、下位尺度の平均値について t 検定による分析を行った。その結果、心理的自立尺度の下位尺度である「現在把握・将来志向」について、公立大学の平均値は5.00($SD=1.05$)、私立大学の平均値は5.23($SD=0.97$)であり、公立大学と私立大学に1%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高い値を示した($t(937)=-3.315$, $p<.01$)。また、「社会的知識・視野」について、公立大学の平均値は3.99($SD=1.12$)、私立大学の平均値は4.19($SD=1.15$)であり、公立大学と私立大学に1%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高い値を示した($t(935)=-2.636$, $p<.01$)。

4. 公立大学と私立大学の学習意欲の下位尺度の比較について (表6)

大学の設置形態別による学習意欲の下位尺度の比較をするために、下位尺度の平均値について t 検定による分析を行った。その結果、学習意欲尺度の下位尺度である「リーダーシップ役割の受容」について、公立大学の平均値は2.08($SD=0.74$)、私立大学の平均値は2.19($SD=0.74$)であり、公立大学と私立大学

に5%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高い値を示した($t(934)=-2.058$, $p<.05$)。また「将来に対する展望」について、公立大学の平均値は3.02($SD=0.59$)、私立大学の平均値は3.10($SD=0.54$)であり、公立大学と私立大学に5%水準で有意差がみられ、私立大学の方が高い値を示した($t(930)=-2.177$, $p<.05$)。さらに「小集団学習への適性」について、公立大学の平均値は2.72($SD=0.60$)、私立大学の平均値は2.55($SD=0.60$)であり、公立大学と私立大学に0.1%水準で有意差がみられ、公立大学の方が高い値を示した($t(936)=4.075$, $p<.001$)。

5. 公立大学と私立大学の心理的自立と学習意欲および自己効力感の相関分析について (表7)

大学の設置形態別による心理的自立と学習意欲および自己効力感の関連性について明らかにするために、Pearsonの相関係数を算出した。その結果、公立大学では、心理的自立と学習意欲($r=.493$, $p<.01$)、心理的自立と自己効力感($r=.618$, $p<.01$)、学習意欲と自己効力感($r=.585$, $p<.01$)は有意なやや強い正の相関を示した。また私立大学でも同様に、心理

表4 公立大学と私立大学の心理的自立と学習意欲および自己効力感の比較

| | 公立大学 | | | 私立大学 | | | t 値 | 自由度 |
|-------|------|------|------|------|------|------|---------|-----|
| | n | 平均 | SD | n | 平均 | SD | | |
| 心理的自立 | 588 | 4.65 | 0.74 | 329 | 4.77 | 0.73 | -2.367* | 915 |
| 学習意欲 | 588 | 2.43 | 0.41 | 319 | 2.43 | 0.40 | -0.088 | 905 |
| 自己効力感 | 589 | 3.06 | 0.53 | 328 | 3.14 | 0.54 | -2.326* | 915 |

各尺度の最大点数：心理的自立7点、学習意欲4点、自己効力感5点 t 検定 * $p<.05$

表5 公立大学と私立大学の心理的自立の下位尺度の比較

| | 公立大学 | | | 私立大学 | | | t 値 | 自由度 |
|-----------|------|------|------|------|------|------|----------|-----|
| | n | 平均 | SD | n | 平均 | SD | | |
| 価値・判断・実行 | 597 | 4.66 | 0.95 | 333 | 4.76 | 0.95 | -1.653 | 928 |
| 自己統制・客観視 | 597 | 4.47 | 0.98 | 335 | 4.53 | 1.00 | -0.807 | 930 |
| 現在把握・将来志向 | 603 | 5.00 | 1.05 | 336 | 5.23 | 0.97 | -3.315** | 937 |
| 適切な対人関係 | 602 | 5.21 | 0.96 | 337 | 5.28 | 0.96 | -0.953 | 937 |
| 社会的知識・視野 | 601 | 3.99 | 1.12 | 336 | 4.19 | 1.15 | -2.636** | 935 |

t 検定 ** $p<.01$

表6 公立大学と私立大学の学習意欲の下位尺度の比較

| | 公立大学 | | | 私立大学 | | | t 値 | 自由度 |
|--------------|------|------|------|------|------|------|----------|-----|
| | n | 平均 | SD | n | 平均 | SD | | |
| 学習態度 | 600 | 2.34 | 0.46 | 329 | 2.30 | 0.47 | 1.459 | 927 |
| リーダーシップ役割の受容 | 602 | 2.08 | 0.74 | 334 | 2.19 | 0.74 | -2.058* | 934 |
| 演習・実習への期待 | 598 | 2.40 | 0.69 | 332 | 2.44 | 0.71 | -0.837 | 928 |
| 将来に対する展望 | 598 | 3.02 | 0.59 | 334 | 3.10 | 0.54 | -2.177* | 930 |
| 小集団学習への適性 | 601 | 2.72 | 0.60 | 337 | 2.55 | 0.60 | 4.075*** | 936 |

t 検定 *** $p<.001$, * $p<.05$

的自立と学習意欲 ($r=.504, p<.01$)、心理的自立と自己効力感 ($r=.628, p<.01$)、学習意欲と自己効力感 ($r=.587, p<.01$)は有意なやや強い正の相関を示した。

表7 公立大学と私立大学の心理的自立と学習意欲および自己効力感の関連性

| | 心理的自立 | 学習意欲 | 自己効力感 |
|-------|--------|--------|--------|
| 心理的自立 | — | .493** | .618** |
| 学習意欲 | .504** | — | .585** |
| 自己効力感 | .628** | .587** | — |

右上：公立大学, 左下：私立大学

Pearsonの相関係数 ** $p<.01$

6. 公立大学と私立大学の心理的自立を従属変数とした重回帰分析について (表8)

大学の設置形態別による心理的自立と学習意欲および自己効力感の相互関係を分析するために、心理的自立を従属変数とし、学習意欲、自己効力感を独立変数とする重回帰分析を行った。解析は強制投入法で行った。その結果、公立大学では、心理的自立を従属変数とした重回帰分析の標準偏回帰係数は、学習意欲 ($\beta=0.205$)、自己効力感 ($\beta=0.497$) で0.1%水準で有意な正の係数を示した。また、私立大学では、心理的自立を従属変数とした重回帰分析の標準偏回帰係数は、学習意欲 ($\beta=0.205$)、自己効力感 ($\beta=0.512$) で0.1%水準で有意な正の係数を示した。

表8 公立大学と私立大学の心理的自立と学習意欲および自己効力感の関連性

| 変数 | 標準偏回帰係数 | |
|----------------|----------|----------|
| | 公立大学 | 私立大学 |
| 学習意欲 | 0.205*** | 0.205*** |
| 自己効力感 | 0.497*** | 0.512*** |
| R ² | .408 | .426 |

重回帰分析 *** $p<.001$

考 察

1. 公立大学と私立大学における主体的学習活動の比較検討

t検定を行った結果、公立大学と私立大学の間には有意差がみられ、私立大学の方が高い値を示した。先行研究では、看護系大学の学生を対象とし、大学の

設置形態別に学習行動を比較したものはなく、柳井、椎名、石井他の研究によると、約20以上の学部にも所属する大学生の学習への取り組み方に関して、公立大学と私立大学を比較したところ、公立大学と私立大学では大きな違いは見られないことが明らかとなっている⁸⁾。しかし、本研究では異なる結果となり、私立大学の学生は公立大学の学生より、主体的に学習活動に取り組んでいることが明らかとなった。また、本研究の調査対象となった学生の学年別の人数比率に公立大学と私立大学では、偏りがあることが明らかとなっており、属性の違いも本研究の結果に影響している可能性も考えられる。今後、学年毎の人数の偏りをなくし、学年毎の公立大学と私立大学の比較を行う必要がある。

また、心理的自立の下位尺度を比較したところ、「現在把握・将来志向」「社会的知識・視野」について、公立大学と私立大学の間には有意差がみられ、私立大学の方が高い値を示した。「現在把握・将来志向」は、現在の自分の状態を理解し、それをもとに将来を考え、努力できることを表している¹⁷⁾。藤森、藤田、鈴木他の研究では、看護系私立大学生は、どの職業に就くかはっきりせず、将来のビジョンが明確でない学生が全体の約1割を占め²⁰⁾、公立大学の医療系大学生を対象とした研究と比較し、看護系私立大学の方が将来のビジョンが明確でない学生が多いことが明らかになっている^{20,21)}。しかし、本研究では、先行研究と異なる結果となり、私立大学の学生の方が現在の自分の状態を把握し、将来を考えられていることが明らかとなった。また、「社会的知識・視野」は、社会的な知識や社会的における自分の役割が理解できることを表している¹⁷⁾。これは、看護という専門分野を超えた広い視野で、物事を捉え、考えることで自分の看護職としての役割を認識することだと考える。佐藤、神原、石光他の研究では、看護系の私立大学は、国立大学や公立大学と比較し、基礎教育科目選択要件が多い傾向にあることが明らかとなっている²²⁾。つまり、看護の専門分野のみならず、その枠を超えた教養に関する教育も多く行われていることを意味しており、学生は幅広い分野の学習を行うことが可能となり、専門分野を超えた広い視野で、物事を捉え、考えることが身につけているのではないかと考える。また、本研究の調査対象となった私立大学の学生は、公立大学の学生よりも3年生や4年生の割合が高く、教養に関する基礎教育科目

を履修後である学生が多いことが考えられる。これらのことから、私立大学の方が公立大学よりも「社会的知識・視野」が高い結果となったと考える。

2. 公立大学と私立大学における学習意欲の比較検討

t検定を行った結果、公立大学と私立大学の間には有意差はみられなかった。このことから、学習意欲は、公立大学と私立大学で相違はないことが明らかとなった。柳井、椎名、石井他の研究では、大学生を対象とし、学習意欲について公立大学と私立大学を比較したところ、公立大学と私立大学では大きな違いは見られないことが明らかとなっており⁸⁾、看護系大学生に限定している本研究においても、同様の結果が得られた。学習意欲に影響を及ぼす要因として、鹿毛は、価値や目的、希望、努力等の個人内要因ばかりではなく、状況・他者・制度といった個人を取り巻く環境も影響することを述べている¹¹⁾。公立大学と私立大学では、学習に取り組みやすい物理的・社会文化的な環境の違いや学生の特性の違い、あるいは教員の人数の違い、大学の教育理念やカリキュラムといった制度の違い等があり、先に述べた個人を取り巻く環境は異なると考えられる。しかし、本研究の学習意欲には公立大学と私立大学の間には有意差はみられなかったという結果から、看護職を目指す学生にとって、これらの個人を取り巻く環境は、学習意欲にそれほど影響しておらず、個人内要因である価値や目的、希望、努力等が学習意欲を規定しているのではないかと推察される。今後さらなる検討を重ねていく必要がある。

また、学習意欲の下位尺度を比較したところ、「リーダーシップ役割の受容」と「将来に対する展望」について、公立大学と私立大学の間には有意差がみられ、私立大学の方が高い値を示した。「小集団学習への適性」については、公立大学と私立大学の間には有意差がみられ、公立大学の方が高い値を示した。「リーダーシップ役割の受容」は、学習意欲尺度の項目の内容から、自分の意見を持ち、論理的にグループメンバーに説明したり、グループメンバーの意見を集約することだと捉えられる。柳井、椎名、石井他の研究では、論理的に物事を考えることや自分の考えをわかりやすく説明すること、他人の意見に根拠ある批判をすることに関して公立大学と私立大学を比較したところ、公立大学と私立大学の学生では大きな違いは見られないことが明らかとなっている

が⁸⁾、本研究は異なる結果となった。橋本、平井の研究によると、他学部の学生と看護学生を比較し有意な差は認められなかったもののリーダーシップの平均値が低かったことが明らかになっており、看護学生の特性としてリーダーシップ能力の低さが指摘されている²³⁾。看護職を目指す学生において、リーダーシップ能力の育成は必要不可欠であるにもかかわらず、低いことが明らかとなっていることから、私立大学のどのような教育特性から、リーダーシップ能力が育成できているのか、今後さらなる検討が必要であると考えられる。また、「将来に対する展望」については、先に述べた主体的学習活動の結果と同様に、公立大学の学生よりも、私立大学の学生の方が将来に対する目標を定め、将来を見据えて学習していることが考えられる。一方、「小集団学習への適性」については、私立大学の学生よりも公立大学の学生の方が高い値を示しており、これは大学により学生数の人数が異なることが一要因ではないかと考える。公立大学は、私立大学に比べ、看護系の学部一学年あたりの学生数は少ないため、講義・演習・実習においても少人数での学習となり、日頃から小集団での学習を行っていることから、公立大学の方が小集団学習に適していると捉えているのではないかと考える。また、柳井、椎名、石井他の研究において、意欲的に取り組める授業方法として、公立大学の学生の方が私立大学の学生よりも少人数で行うゼミナールや実験・実習を選択していることが明らかとなっている⁸⁾。このことから、公立大学の学生は、小集団学習に対して抵抗なく、意欲的に取り組むことができていると推察されるため、公立大学の方が私立大学よりも「小集団学習への適性」が高い結果となったのではないかと考える。

3. 公立大学と私立大学における自己効力感の比較検討

t検定を行った結果、公立大学と私立大学の間には有意差がみられ、私立大学の方が高い値を示した。このことから、私立大学の学生は公立大学の学生より、自己効力感が高いことが考えられる。Banduraは、自己効力感を高める4つの情報源として、「遂行行動の達成」「代理的経験」「言語的説得」「情動的喚起」を挙げている¹²⁾。この4つの中でも自己効力感を高めるのに最も重要な情報源は「遂行行動の達成」といわれている¹²⁾。これは、学生自身が学習行動を遂行できたという経験をすることによって、自己効力感

が高まることを意味していると考えられる。先行研究によると、看護職を目指す学生は、演習や実習での経験^{24,25)}、国家試験や進路決定による達成感が自己効力感を高めていることが明らかになっている²⁶⁾。本研究では、経年的に自己効力感の変化を調査しておらず、どの段階で看護職を目指す学生の自己効力感が高まっているか定かではなく、また大学入学時点ですでに学生個々に備わっている自己効力感もあると考えられるが、先に述べた演習や実習での経験、国家試験や進路決定による達成感が、本研究においても少なからず看護職を目指す学生の自己効力感に影響しているのではないかと推察される。今後は、私立大学の看護職を目指す学生が公立大学の学生と比較して自己効力感が高い要因を明らかにするため、私立大学の看護職を目指す学生の自己効力感に影響を及ぼしている要因を検討していくことや縦断的に自己効力感の変化を調査していく必要がある。

4. 公立大学と私立大学における心理的自立と学習意欲および自己効力感の関連性について

Pearsonの相関係数を算出した結果、公立大学と私立大学ともに、心理的自立と学習意欲および自己効力感には有意なやや強い正の相関を示した。また、重回帰分析を行った結果、公立大学と私立大学ともに、標準偏回帰係数は、学習意欲、自己効力感で有意な正の係数を示した。これらのことから、看護職を目指す学生において、大学の設置形態にかかわらず、主体的学習活動は学習意欲および自己効力感と正の関連性があることが明らかとなり、学習意欲や自己効力感を相互に高めることで、主体的学習活動につながることを期待できる。また、主体的学習活動を行うことで、学習意欲や自己効力感も相互に高まることを示唆された。先に述べたように、私立大学の学生の方が公立大学の学生よりも自己効力感が有意に高かったことや、学習意欲の下位尺度である「リーダーシップ役割の受容」や「将来に対する展望」「小集団学習への適性」には公立大学と私立大学で有意差がみられたことをふまえると、公立大学の学生は私立大学の学生よりも自己効力感をさらに高められるような支援を行うことや、公立大学の学生は学習意欲を規定する因子である「リーダーシップ役割の受容」や「将来に対する展望」を私立大学の学生よりも強化するための支援を行い、私立大学の学生は学習意欲を規定する因子である「小集団学習への適性」を公立大学の学生よりも強化するための支

援を行うといった各大学の学生の特性をふまえた上で、学習意欲や自己効力感を相互に刺激し高めることができる教育的な支援を行っていくことが重要である。

5. まとめ

本研究では、公立大学と私立大学を比較し、看護職を目指す学生の主体的学習活動と学習意欲および自己効力感について検討を行った。その結果、公立大学と私立大学で有意な差がみられたものもあったが、平均値を見ると、公立大学と私立大学で大きな相違はみられなかった。大学での看護基礎教育では、公立大学や私立大学といった設置形態が異なっても、保健師助産師看護師学校養成所指定規則によって、卒業時に取得しなければならない単位数が決まっており、さらにその中でも、看護専門分野の内容や教養基礎の内容等の単位数が決められている。このことをふまえると、公立大学や私立大学の各大学の設置の目的や教育目標をもとに大学独自のカリキュラムが編成されていても、学習しなければならない知識や技術はある程度決まっており、大学間での学生の学習内容や学習環境に大きな相違はないことが考えられる。そのため、主体的学習活動や自己効力感に有意な差があるものの、平均値をみると大きな差がない結果となったのではないかと推察される。今後は、教育内容の異なる他学部との学生の比較を行い、看護職を目指す学生の学習特性も検討していく必要があると考える。

本研究の限界と課題

本研究では、公立大学と私立大学の比較を行ったが、対象者数が限られており、一般化するには限界がある。今後は、調査対象者数を増やし、調査を進めていく必要がある。また、看護基礎教育を行う教育機関は大学に限らず、短期大学や専門学校もあるため、これらの教育機関も併せて比較を行っていく必要があると考える。

結 論

1. 主体的学習活動と自己効力感は、公立大学よりも私立大学の看護職を目指す学生の方が高いことが明らかとなった。
2. 心理的自立（主体的学習活動）の下位尺度である「現在把握・将来志向」と「社会的知識・視野」は、公立大学よりも私立大学の看護職を目指す学

生の方が高いことが明らかとなった。

3. 学習意欲の下位尺度である「リーダーシップ役割の受容」と「将来に対する展望」は、公立大学よりも私立大学の看護職を目指す学生の方が高く、「小集団学習への適性」は公立大学の看護職を目指す学生の方が私立大学よりも高いことが明らかとなった。
4. 公立大学と私立大学の看護職を目指す学生ともに、主体的学習活動は学習意欲および自己効力感と正の関連性があることが明らかとなり、主体的学習活動を促すためには、上述した公立大学と私立大学の看護職を目指す学生の特性をふまえた上で、学習意欲や自己効力感を相互に刺激し高めることが重要である。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、調査実施にご協力して頂いた大学および大学の学生の皆様に深く感謝致します。

文 献

- 1) 厚生労働省（看護学教育の在り方に関する検討会）. 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標（2004）.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm（2016年6月13日アクセス）
- 2) 安ヶ平伸枝, 菱沼典子, 大久保暢子他. 基礎看護学担当教員の捉える学生の特徴と教授学習方法の工夫. 聖路加看護学会誌 2010; 14(2): 46-53.
- 3) 柳井晴夫, 石井秀宗. 看護系大学において必要とされる教科科目・資質能力・スキルに関する調査研究. 聖路加看護学会誌 2007; 11(1): 1-9.
- 4) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（2011）.
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>（2016年6月13日アクセス）
- 5) 服部祥子. 人を育む人間関係論 援助専門職者として、個人として. 東京：医学書院. 2003.
- 6) 川上華代. 現代学生の特徴と学生相談についての一考察 問題や症状が維持され、変わらない

学生の姿から見えてくるもの. 和光大学現代人間学部紀要 2013; 6: 141-153.

- 7) 一般社団法人日本看護系大学協議会. 看護系大学の現状と課題（2018）.
<http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2018/06/monbukagakakusyouto20180618.pdf>（2018年8月26日アクセス）
- 8) 柳井晴夫, 椎名久美子, 石井秀宗他. 大学生の学習意欲等に関する調査研究. 大学入試センター研究紀要 2003; 32: 57-126.
- 9) 溝上慎一. アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東京：東信堂. 2016.
- 10) 浅海健一郎. 子どもの「主体性尺度」作成の試み. 人間性心理学研究 1999; 17(2): 154-163.
- 11) 鹿毛雅治. 学習意欲の理論—動機づけの教育心理学. 東京：金子書房. 2014.
- 12) Bandura A. (1977). 原野広太郎監訳. 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—（オンデマンド版）. 東京：金子書房. 2012.
- 13) 永嶋由理子. 看護学生の学習意欲の検討. 山口県立大学看護学部紀要 2001; 5: 39-45.
- 14) 成田健一, 下仲順子, 中里克治他. 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—. 教育心理学研究 1995; 43: 306-314.
- 15) Sherer M, Maddux JE, Mercandante B et al. The self-efficacy scale: Construction and validation. Psychological Report 1982; 51: 663-671.
- 16) 三宅幹子. 特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に与える影響—課題固有のフィードバックの操作を用いて—. 教育心理学研究 2000; 48: 42-51.
- 17) 高坂康雅, 戸田弘二. 青年期における心理的自立（Ⅱ）—心理的自立尺度の作成—. 北海道教育大学紀要教育科学編 2006; 56: 17-30.
- 18) 渡邊恵子. 自立の概念化の試み. 日本女子大学紀要人間社会学部 1990; 1: 189-206.
- 19) 高坂康雅, 戸田弘二. 青年期における心理的自立（Ⅰ）—「心理的自立」概念の検討—. 北海道教育大学附属教育実践総合センター紀要 2003; 4: 135-144.
- 20) 藤森由子, 藤田絹代, 鈴木智子他. 地方私立看護系大学生における職業的アイデンティティと進路決定プロセスの関連. 日本看護学教育学会誌 2017; 27(1): 53-60.

- 21) 本多陽子, 落合良行. 重要な決定にまつわる心理的特性からみた医療系大学生の進路決定プロセスの特徴. 筑波大学心理学研究 2004 ; 28 : 78-79.
- 22) 佐藤亜月子, 神原裕子, 石光芙美子他. 看護学教育カリキュラムにおける基礎教育科目の検討 1-看護系大学のシラバス調査からのカリキュラムの考察-. 目白大学健康科学研究 2011 ; 4 : 53-59.
- 23) 橋本由里, 平井由佳. 専攻別比較からみた看護学生の情動知能特性. 島根県立大学出雲キャンパス紀要 2014 ; 9 : 9-16.
- 24) 遠藤恵子, 松永保子, 遠藤芳子他. 看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第3報). 山形保健医療研究 2000 ; 3 : 9-15.
- 25) 眞鍋えみ子, 笹川寿美, 松田かおり他. 看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. 日本看護研究学会雑誌 2007 ; 30(2) : 43-53.
- 26) 矢野紀子, 羽田野花美, 酒井淳子他. 看護系大学生の職業コミットメント～入学後2年間における経時的変化～. 愛媛県立医療技術大学紀要 2006 ; 3(1) : 59-66.

受付 2018. 8. 30

採用 2019. 1. 8